

肉体関係を持つてから、恋人ごっこはバイトではなく、ただのごっこでしかなくなつたが——なにしろ、肉体関係がある上で金銭を受け取ると完全に援助交際でしかなく、それは帝人の感覚としてはどうしても受け付けられない——相変わらずデート費用は臨也持ちだったし、それまでのバイト代は押しつけられるようにして受け取つたので、いつもよりも裕福ですらあつた。

近いに未来に終わる関係だと覚悟していても、それでももうすぐ臨也に逢えると思うと嬉しくなる。もしかしたら、今夜にも別れを告げられるかもしれないのに、と自嘲を浮かべた。それでも、自分はこの恋を自ら手放せない。

——俺の恋人にならない？

きつかけとなつた臨也の言葉を思い出す。あのとき、願くべきではなかつたのだらう。けれど願かなくても、結果は一緒だったのかもしれない。恋した自覚の時期が遅いか早いかの違いではないのかもしれないかつた。

もはや恋したことを後悔すらできない。自分にできることは、ひたすらに覚悟することだけだ。できるならば、自分から別離を言い出した方がよいけれど、少なくとも今はその勇気がない。

いずれ来るとわかつている結末なのに、自ら幕が引けない。それは自分の狡さだった。

(知らなかつたな。自分のことなのに)

自分は結構無鉄砲だと思つていたけれど、実際はただの卑怯者で臆病者だつたらしいと、また自嘲を重ねた。

やがて、臨也の住まうマンションへは滞りなく到着する。臨也の住むマンションはセキュリティもそこそこしっかりしているが、部屋の前まで行く術はすでに熟知している。

「やあ、いらつしやい」

玄關まで到着すれば、あとは彼に電話をすれば良いだけだ。電話には出ず、臨也は直接玄關の扉を開いた。

「こんにちは」

電話を切つて挨拶すると、臨也はいつも通りに柔らかな笑みを浮かべている。……が、違和感があつた。

(あれ?)

不思議に思い、内心首を傾げた。

「あがつて」

言われるままに室内へと上がり込んだが、どうも臨也は不機嫌の様子だ。普段、そうした感情を見せない彼なのに、あまりにもあからさまに空気がいつもと違う。何があつたのだらうか。

「あのさあ、帝人君。何、シズちゃんとじゃれてんの？」

「え、見てたんですか？」

「見てたら今頃殺しあいだよ。で、何された？」

見てもいないのに、静雄に何かをされた、という事実はわかるらしい。どうしてわかるのだらう。心底不思議だ。

「何、つて。頭を撫でられただけですけど」

だけ、というにはずいぶんしつかりと何度も、しばらく撫でられたが、あまり言わない方がいいだらう。

「ふうん。帝人君は俺のだって自覚、足りないよね」